

## ○小山内信智 南哲行 竹崎伸司

– 32 –

生はあまり影響せず、崩壊は表面地形による集水状況に大きな影響を受けていると考えられる。

火山岩類；天然林と草地の勾配ランクの占有率に大きな差はなく、崩壊面積率はいずれの植生状況でも20～30°の範囲が最も高い。

第三紀層；天然林と草地の勾配ランクの占有率はほぼ同じである。全体に高い崩壊面積率を示すが、10～20°の緩い斜面での崩壊発生率が他の地質に比べて高く、特に草地での緩勾配斜面の崩壊面積率が高いのが特徴である。地すべり的な崩壊に対しては森林による抑止力は小さいと考えられているが、やや緩い勾配の斜面においては一定の抑制効果があることを示唆している。

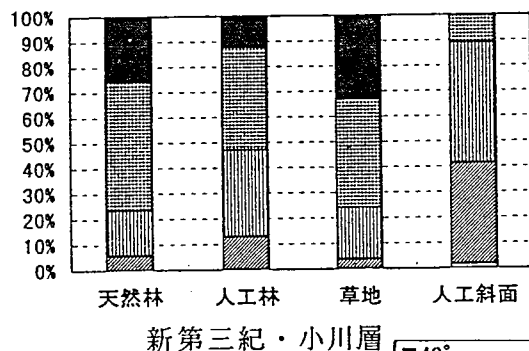
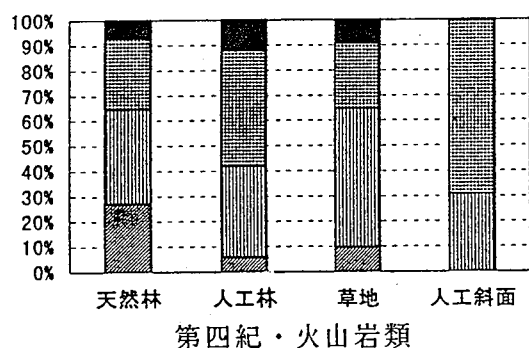
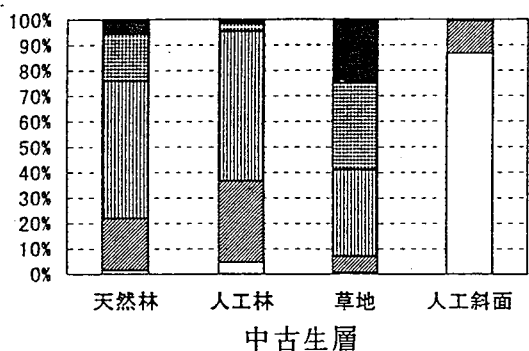


図-3 斜面勾配ランク占有率

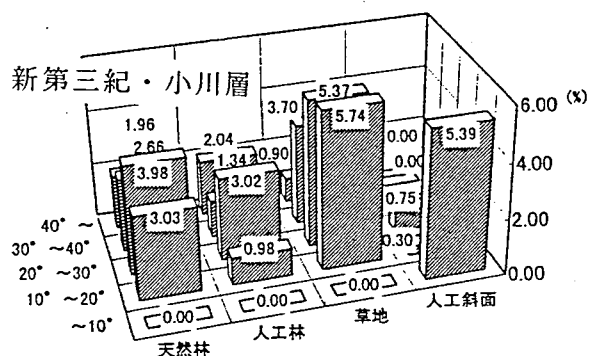
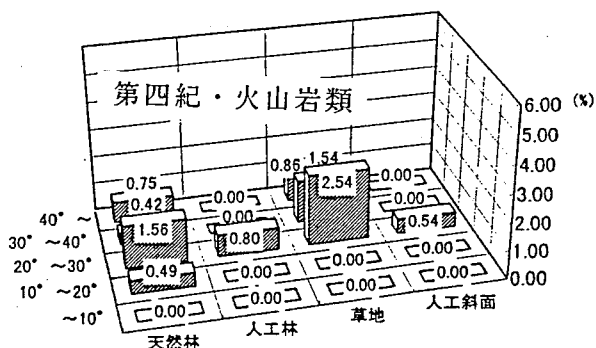
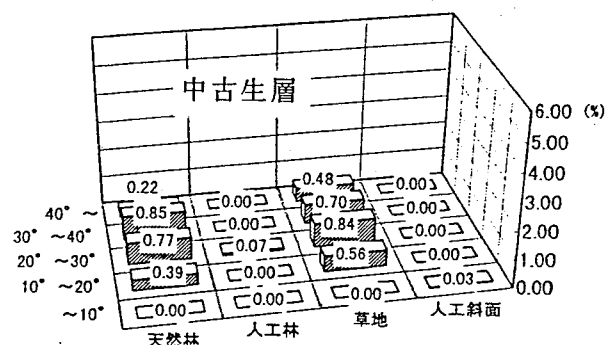
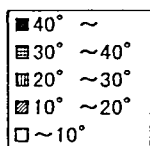


図-4 植生状況・斜面勾配ランク別崩壊面積率

#### 4. まとめと今後の課題

地盤の安定していると考えられる中生層では植生による影響が認められなかったが、火山岩類および第三紀層では斜面勾配ランク毎に比較しても、草地に比較して天然林の崩壊面積率が低くなっている傾向が認められた。

しかしながら、表層土厚の薄い高標高の範囲や溪岸侵食の影響範囲のデータをまとめて処理しているため、植生による崩壊抑制効果以外の要素が影響している可能性がある。今後、比較範囲の条件をさらに近いものとし、また、樹林の疎・密および高・低、元斜面の崩壊履歴、集水面積等のデータを含めて再整理したい。